

# フランコ独裁期のスペインのカタルーニャでの

## 初等教育における言語（使用）についてのかたり

竹内めい

### 1. はじめに<sup>1)</sup>

カタルーニャはスペインとフランスにまたがる地域だが、本稿で扱うのはスペインのカタルーニャである。カタルーニャは独自の言語と文化を持つ地域で、第二共和政期 (1931-1936) には、スペイン中央政府だけでなくカタルーニャ自治州政府も教育について決定権を持っていた。カスティーリャ語の授業は必須だったが、カタルーニャ語の授業を行うことやカタルーニャ語を教育言語とすることもでき、カタルーニャ語とカスティーリャ語のバイリンガル教育が可能であった。

内戦 (1936-1939) を経て誕生したフランコ独裁期 (1939-1975) には、ひとつのスペインが掲げられた。カタルーニャ社会の脱カタルーニャ化が目指され、その独自性は弾圧の対象となった。独裁政権のイデオロギーは教育の分野にも影響し、第二共和政期の教育を破壊してひとつのスペイン人を作ることが目指された。反体制的な教員を処分し、学校への視察派遣や教科書の検閲などで教育がコントロールされた。言語については、カスティーリャ語が唯一の教育言語と規定され、カタルーニャのバイリンガル教育は廃止された。カタルーニャ語は教育言語としても教科書としても禁止された。<sup>2)</sup>このような政権の教育モデルに反対して、カタルーニャでは 1950 年代から教育刷新運動が起こった。教員や児童の保護者など教育現場から始まり、第二共和政期の教育をモデルとして、カタルーニャ語の擁護を目的の一つにしていた。この運動から私立の学校が新たに設立されるが、それは政権から私立校への管理が緩んだことや学校数の不足に政権が対応しきれなかったことで可能となったものだった。<sup>3)</sup>

第二共和制期から独裁期への教育の変化は、カタルーニャにおいては言語に関しても大きなものであった。しかし、教育現場の実態は必ずしも明らかでない。そこで、この研究では教育現場に注目して、学校生活では言語やその使用に関して何が起こっていたのか、教員や児童はどんな気持ちだったのかを明らかにしていきたい。

### 2. 先行研究と本稿の目的

フランコ独裁期のカタルーニャの初等教育の実情を扱った研究に Marquès (1993) がある。この研究は独裁期の学校に関する研究におけるオーラルヒストリーの重要性を述べたもので、1939 年から 1957 年までのジローナ県の公立小学校を対象にしている。当時の教員と児童へのインタビューを実施したことで、書かれた史料からは見えてこなかった学校生活の複雑さや多様性が明らかになったと述べている。その一例としてカタルーニャ語の使用を挙げている。インタビューによって、政権からの指示に従って教員たちがカスティーリャ語で授業をして

いたと同時に、児童の学習内容への理解を優先する考えからカタルーニャ語も使用していたことが明らかになったという。しかし、こうしたカタルーニャ語の使用はあくまでも教育的な観点から行われたもので、政権の教育方針に対する抵抗ではなかったことも指摘している。

当時の児童の証言を集めたものに Barbacil (2008) がある。これは Vilanova i la Geltrú 市役所が街の歴史を後世に残すプロジェクトをまとめたものの一部であり、教育をテーマにしている。第二共和政期から独裁期にかけて初等教育を受けた市民の証言によると、第二共和政期はカタルーニャ語で授業を受けていたが、独裁期が始まるとカスティーリャ語の強制が始まったという。独裁期中、1960年までに初等教育を受けた市民の証言には、授業はカスティーリャ語だったというものがある一方で、教科書はカスティーリャ語だったが、授業はカタルーニャ語だったというものもある。1960年代からは、市民主導の学校設立や教育言語としてのカタルーニャ語の使用などの実現を目指した動きが人々の間で起こったことが述べられているが、これに関する児童の証言は載っていない。こうした動きは「1. はじめに」で触れた政権による教育に対する反対から1950年代に始まったカタルーニャでの教育刷新運動の一部だと思われる。

どちらの先行研究も当時の教育現場の様子が分かる大変重要なものである。しかし Marquès (1993) はオーラルヒストリーの重要性を述べるのが目的であり、Barbacil (2008) は証言を次世代に残すことが目的となっている。そのため、どちらの研究でも人々が語った内容の詳細な分析は行われていない。またカタルーニャの教育現場の言語（使用）に影響があったのではないかと考えられる教育刷新運動から新設された私立校での学校生活は、公立校を対象としている Marquès (1993) から、Barbacil (2008) から分からない。そこで、本稿では、教育刷新運動の時期も含めた当時の児童や教員の体験を集めて分析し、学校生活での言語（使用）について調査することを目的とする。

### 3. 方法

#### 3.1. インタビューの概要

本稿で資料として用いるのは、2019年と2020年に筆者が行った半構造化インタビューである。インタビューは海外の研究者やジャーナリストをカタルーニャの市民や研究者とつなぐ活動をしている市民団体 Foreign Friends of Catalonia や退職した教員のグループ RELLA (Associació de mestres i professorat jubilats) の協力を得て、対面もしくは電話を使ってカスティーリャ語で行った。インタビューの協力者は独裁期のカタルーニャで児童もしくは教員だった経験を持つ人である。インタビューの主要なテーマは言語ではなく絵を描くことだったが、授業内の教員の使用言語に関する質問を含んでいた。具体的には、児童だった協力者への「教員は何語で授業をしましたか」という質問と、教員だった協力者への「あなたは何語で授業をしましたか」という質問である。協力者はインタビューの中で、授業内の教員の使用言語に限らず、授業時間内外での児童や教員の使用言語、政権からの視察と言語、学校生活での言語についての気持ちなど、言語（使用）に関して様々なことを語った。<sup>4)</sup>こうした言語（使用）に関するかたまりをインタビューから抜き出し、その内容ごとに分類して整理する。

### 3.2. インタビュー協力者の背景

協力者の背景を表1に示した。協力者はカタルーニャ語を母語とする50代から80代の男女21名である。全員が独裁期に初等教育を受けており、そのうち5名は独裁期に教員として小学校に勤務した経験を持つ。表の「児童として」と「教員として」には、在学／勤務の期間と、通った／働いた学校の種類を示した。「公立」は公立校、「私立宗」は宗教系の私立校、「私立」は私立校、「新私立」は1950年代からの教育刷新運動で新設された私立校を指す。就学年数がそろっていないのは、個別の事情、義務教育期間の変更、<sup>5)</sup>小学校と幼稚園が併設されており協力者が期間を合わせて記憶していることなどのためである。

表1 協力者の背景

番号	生年	性別	児童として		教員として	
1	1936	女性	1942-1946 1946-	私立 私立宗		
2	1938	女性	1941-1952	私立宗	1975-	新私立
3	1939	男性	1945-1949	私立宗		
4	1941	女性	1946-1950	私立宗		
5	1943	男性	1949-1957	私立宗	1961-1964 1964-1966 1966-1980	私立宗 新私立 新私立
6	1944	男性	1950-1958	公立		
7	1945	女性	1951-1959	私立宗		
8	1947	男性	1952-1958	私立宗		
9	1948	女性	1953-1958	公立	1968-	新私立
10	1949	男性	1955-1963	私立宗		
11	1951	女性	1950's-1960's	私立宗	1969-	新私立
12	1954	男性	1960-1966	私立宗	1970-	新私立
13	1956	女性	1966-1970	新私立		
14	1959	男性	1964-1966 1966-1969	新私立 公立		
15	1960	女性	1966-1970 1970-1974	公立 新私立		
16	1960	女性	1966-1970 1970-1974	私立宗 新私立		
17	1962	女性	1965-1970 1970-1976	私立宗 新私立		
18	1963	男性	1968-1977	公立		
19	1963	女性	1968-1976	公立		
20	1966	女性	1972-1980	公立		
21	1968	女性	1974-1982	公立		

#### 4. 結果

21人のインタビューの中から、言語（使用）に関する77のかたまりを抜き出した。それらを内容によって以下の5つのカテゴリと16つのサブカテゴリに分類し、表2に示した。

表2 カテゴリとサブカテゴリ

カテゴリ	サブカテゴリ
a. カスティーリャ語の優位	a.1. カスティーリャ語での授業
	a.2. 教科書と試験
	a.3. 授業外での児童間でのカスティーリャ語の使用
	a.4. 政府からの視察でのチェック
b. カタルーニャ語の否定	b.1. 教員から児童への授業内でのカタルーニャ語の使用の禁止
	b.2. 教員から児童への授業外でのカタルーニャ語の使用の禁止
	b.3. 政府からの視察の際に教員がカタルーニャ語の使用を隠蔽
c. カタルーニャ語の存在	c.1. 授業外での児童間でのカタルーニャ語の使用
	c.2. 授業外での教員と児童間でのカタルーニャ語の使用
	c.3. 授業内で児童の理解を助けるためのカタルーニャ語の使用
	c.4. 一部の学校でのカタルーニャ語での授業
d. 言語に関する当時の気持ち	d.1. 学校でのカスティーリャ語の強要への受け止め
	d.2. 学校でのカスティーリャ語の強要による表現の不自由さ
e. 言語に関する成長後の気持ち	e.1. カタルーニャ語の教育を受けられなかったことへの不満や気づき
	e.2. 学校でのカタルーニャ語の禁止への不満
	e.3. カタルーニャ語の社会的地位の低さへの気づき（現在ではなく、独裁期中）

以下では各カテゴリについて協力者のかたまりを交えながら述べていく。カテゴリは【】で、サブカテゴリは<>で示す。協力者のかたまりは「」で示し、その最後にどの協力者のかたまりなのかを「表1 協力者の背景」の番号で示した。

##### 【a. カスティーリャ語の優位】

このカテゴリは4つのサブカテゴリから構成され、教育現場でカスティーリャ語が優先的に使われていたことを示す。次のカテゴリ【b. カタルーニャ語の否定】とセットになっている。

学校では<a.1. カスティーリャ語での授業>が行われ、授業中は教員も児童もカスティーリャ語を使用していたことが語られた。授業外や家庭でのカタルーニャ語使用と対比する形で語る協力者もいた。

「カタルーニャの外から来た先生がほとんどでした。授業は全部カスティーリャ語でした。」(6)

「学校での授業は全てカスティーリャ語でしたが、家ではカタルーニャ語でした。」(19)

カタルーニャ語での授業が行われた学校もあったが、その場合も【a. カスティーリャ語の優位】があり、<a.2. 教科書と試験>はカスティーリャ語だったことが分かった。

「授業はカタルーニャ語でしたが、教科書と試験はカスティーリャ語でした。」(13)

授業時間だけでなく、授業外の時間について語った協力者もいた。カタルーニャ語の授業はなく、国内移民の児童とカタルーニャの児童との共通言語はカスティーリャ語だったため、<a.3. 授業外での児童間でのカスティーリャ語の使用>が日常化していたことが語られた。

「国内移民の児童が多い学校でした。学校ではカタルーニャ語の授業はないので彼らはカスティーリャ語しか話さなくて、休み時間はカタルーニャの生徒もカスティーリャ語で話しました。」(21)

【a. カスティーリャ語の優位】は<a.4. 政府からの視察でのチェック>に関するかたりからも分かる。視察では全教科に平等にチェックが入っていたというわけではなく、カスティーリャ語の授業が重要視されていたことがうかがえる。

「視察はカスティーリャ語の授業を何時間やっているとか、歴史の教科書は何を使っているとかかそういうことを見ていました。」(9)

#### 【b. カタルーニャ語の否定】

このカテゴリーは3つのサブカテゴリーから構成される。先のカテゴリー【a. カスティーリャ語の優位】とセットになっており、次のカテゴリー【c. カタルーニャ語の存在】とは矛盾するものである。

<a.1. カスティーリャ語での授業>では、<b.1. 教員から児童への授業内でのカタルーニャ語の使用の禁止>が口頭で、時には暴力を伴って指導されたことが語られた。

「カタルーニャ語が出てしまうと頭を叩かれて、“Habla en cristiano.”と言われました。」(11)

このかたりの“Habla en cristiano.”という表現は、文字通りには「キリスト教の言葉で話さない」という意味だが、時を経て「カスティーリャ語で話さない」を意味するようになったとされている。<sup>6)</sup>

授業内だけでなく、<b.2. 教員から児童への授業外でのカタルーニャ語の使用の禁止>も語られた。

「休み時間に友だちと話している時も先生から『カスティーリャ語で』と注意されました。」(12)

学校によってカタルーニャ語の容認程度は異なるが、児童も巻き込んで<b.3. 政府からの視察の際に教員がカタルーニャ語の使用を隠蔽>しようとしていたことが分かった。

「視察の時は教室の掲示物を変えました。カスティーリャ語のものを貼りました。」(9)

「視察の時は先生からカタルーニャ語で話さないように言われていました。」(7)

#### 【c. カタルーニャ語の存在】

このカテゴリーは4つのサブカテゴリーで構成されており、先のカテゴリー【b. カタルーニャ語の否定】とは矛盾している。

<a.3. 授業外での児童間でのカスティーリャ語の使用>と<b.2. 授業外でのカタルーニャ語の使用の禁止>が語られた一方で、<c.1. 授業外での児童間のカタルーニャ語の使用>も語られた。国内移民の児童がカタルーニャ語を習得していた場合があったことも分かった。

「授業外では友だちとカタルーニャ語で話すことが許されていました。」(5)

「アンダルシアからの移民の児童が多くいましたが、カタルーニャの児童と遊ぶ中でカタルーニャ語を習得していきました。彼らとのコミュニケーションにさほど問題はありませんでした。」(18)

<c.1. 授業外での児童間のカタルーニャ語の使用>だけでなく、<c.2. 授業外での教員と児童間でのカタルーニャ語の使用>も語られた。

「カタルーニャ出身の先生とは授業中はカスティーリャ語でも、休み時間はカタルーニャ語で話しました。」(4)

<a.1. カスティーリャ語での授業>では、<c.3. 授業内で児童の理解を助けるためのカタルーニャ語の使用>もあったことが明らかになった。基本的にはカスティーリャ語を使用するが、児童の母語であるカタルーニャ語を時々使うことで授業を円滑に進めていたようだ。

「先生はカスティーリャ語とカタルーニャ語を混ぜて話していました。」(1)

「フランコは教育言語としてカスティーリャ語を強要しましたが、先生たちは時々カタルーニャ語を使っていました。生徒に素早く指示を出すためです。」(18)

政権からは<a.1. カスティーリャ語での授業>を求められていたが、<c.4. 一部の学校でのカタルーニャ語での授業>があったことが分かった。ただ、こうした学校でもカタルーニャ語の授業はなかったことが語られた。

「市立の学校で、国が上司というわけではなかったので、独裁期も革新的な教育を維持していました。授業はカタルーニャ語でした。」(9)

「Escuela cooperativa で働いていました。こうした学校の目的の一つはカタルーニャ語の擁護でした。違法でしたが、こうした学校ではカタルーニャ語での授業が容認されていました。」(5)<sup>7)</sup>

「カタルーニャ語の授業はなかったけれど、授業はカタルーニャ語でした。」(16)

#### 【d. 言語に関する当時の気持ち】

このカテゴリーは2つのサブカテゴリーから構成され、協力者が児童だった当時、学校での言語（使用）についてどう感じていたのかを示すものである。

協力者によって程度の差はあるものの、授業内外でカスティーリャ語の使用を求められた。こうした状況に対する当時の気持ちは<d.1. 学校でのカスティーリャ語の強要への受け止め>という形で表現された。

「当時は学校でのカスティーリャ語の強要を自然なものとして受け止めていました。」(1)

「家ではカタルーニャ語を話し、学校ではカスティーリャ語を話さなければいけないことは普通のことだと思っていました。」(8)

しかし<d2. 学校でのカスティーリャ語の強要による表現の不自由さ>を感じていた協力者もいた。

「家ではカタルーニャ語でした。外ではカスティーリャ語で、精神的に閉ざされていました。」(2)

#### 【e. 言語に関する成長後の気持ち】

このカテゴリーは2つのサブカテゴリーで構成される。初等教育を修了した後、当時の学校での言語（使用）についてどのように感じていたのか、また現在どのように感じているのかを示すものである。

自身の受けた教育に関して、<e.1. カタルーニャ語の教育を受けられなかったことへの不満や気づき>が語られた。児童だったときは母語であるカタルーニャ語教育を受けていないことを自然なことだと捉えていたが、成長後にその事実に気づき、不満を感じている。

「働き始めたときにカタルーニャ語の語彙がないことに気づきました。」(7)

「カタルーニャ語教育を受けられなかったこと、カタルーニャ語の本を読んでこなかったことに、成長してから気づきました。」(19)

「カスティーリャ語教育のせいでカタルーニャ語を深く学ぶことができませんでした。カタルーニャ語で教育を受けてカスティーリャ語は第二言語として学びたかったです。」(17)

<e.2. 学校でのカタルーニャ語の禁止への不満>も語られた。<e.1. カタルーニャ語の教育を受けられなかったことへの不満や気づき>とは異なり、児童だった当時から続くものである場合もあった。

「フランス語の授業がありました。それは良かったと思うのですが、フランス語は許されるのに、カタルーニャ語は話してはいけなかったのです。自分の言語を話すと言われるのは深刻なことです。怒りを感じましたし、その感情はまだ残っています。」(11)

「独裁期はカタルーニャ語の名前を出生登録できませんでしたが、偶然にも私は Roser で届けが出せました。学校では Rosario と呼ばれて、その名前で成績表を渡されました。先生に言っても『あなたは Rosario であって Roser ではない』と言われて、Rosario という名前が今でも嫌いです。」(21)<sup>8)</sup>

「家ではカタルーニャ語を話し、学校ではカタルーニャ語を話すことも読み書きを学ぶことも歌うこともできなかったというのはおかしいことです。カタルーニャ語は軽視されていました。」(2)

<e.3. カタルーニャ語の社会的地位の低さへの気づき（現在ではなく、独裁期中）>についても語られた。児童だったときはカタルーニャ語の社会的地位には気づいていなかったが、成長してその地位が低いものであると気づいたという。

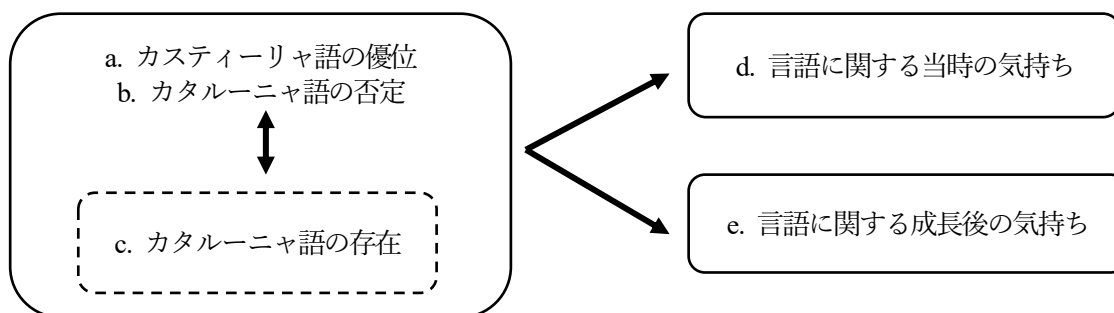
「成長してから家の外でカタルーニャ語を話すことは少しみっともなく、社会的に下に見られることに気づきました。」(8)

「カタルーニャ人家庭でもカスティーリャ語を話す人は結構いました。社会的に上に見られるのです。」(11)

## 5. 考察

「4. 結果」で詳しく述べた5つのカテゴリーについて、その関係を図1に示した。学校生活では【a. カスティーリャ語の優位】と【b. カタルーニャ語の否定】があった。政権によって教育言語はカスティーリャ語とされており、教育現場でもカスティーリャ語での授業が行われた。授業では教員も児童もカスティーリャ語を使用しており、児童の口からカタルーニャ語が出ると教員から注意された。一部の学校ではカタルーニャ語での授業が行われたが、その場合も教科書や試験はカスティーリャ語だった。授業外であっても児童間でカスティーリャ語を使い、教員からカタルーニャ語の使用を注意されることもあった。また、学校に視察が来た際は、カスティーリャ語の授業が重要視され、教員たちはカタルーニャ語の使用を隠そうとした。こうした【a. カスティーリャ語の優位】と【b. カタルーニャ語の否定】と同時に、教育現場には【c. カタルーニャ語の存在】もあった。授業外での児童間また児童と教員との会話ではカタルーニャ語が使われた場合もあった。基本的に授業はカスティーリャ語だったが、児童の理解を助けるために教員がカタルーニャ語を部分的に使用することもあった。さらに学校によってはカタルーニャ語での授業を容認していた。このように学校生活でカタルーニャ語が使われていたが、視察の際には隠されていた。こうした学校生活の中で児童は【d. 言語に関する当時の気持ち】を持った。家ではカタルーニャ語を話し、学校ではカスティーリャ語を話さなければいけない状況を自然なものとして受け止めた場合もあったが、それに窮屈さを感じた場合もあった。そして初等教育を修了してから【e. 言語に関する成長後の気持ち】を持った。カタルーニャ語の教育を受けられなかったことへの気づきや不満、カタルーニャ語が禁止されていたことへの不満、カタルーニャ語の社会的地位の低さへの気づきがあった。協力者はカタルーニャ語の教育を受けられなかったこと、カタルーニャ語が禁止されたことへの不満を現在でも持ち続けている。

図1 初等教育における言語（使用）についてのかたり



独裁期、カタルーニャ語は教育言語また教科として公的には排除されたが、教育現場での言語（使用）が急に変ったわけではないことがインタビューから分かった。授業外で教員や児童はカタルーニャ語を使い続け、授業中に教員が部分的にカタルーニャ語を使うこともあった。こうしたカタルーニャ語の使用は、児童の母語がカ



タルーニャ語であり、家庭内ではカタルーニャ語が使われ続けたことが大きな役割を果たしたと思われる。監視された教育の中で、話される言葉（残らずに消えてしまう言葉）にはカタルーニャ語が使われた場合があったと考えられる。

インタビューからは自身が受けた初等教育について協力者が不満を持っていることも明らかになった。カタルーニャ語の教育が受けられなかったことや学校生活でカタルーニャ語の使用が禁止されたことなどによって生まれた不満を協力者は今でも持っている。また、母語の読み書きに問題があると感じている、もしくは学術的なカタルーニャ語を習得できなかったと感じている協力者もいた。これらはカタルーニャ語が教育言語また教科として排除されたことによる影響が今も続いていることを示唆している。

インタビューで語られたカタルーニャ語の教育言語としての使用は、1950年代から始まる教育刷新運動で新設された私立校での就学または勤務の経験を持つ協力者に共通するものであった。先行研究からは教育現場での言語（使用）における教育刷新運動の影響がはっきりとはしなかったが、新設された私立校の存在は学校生活の言語（使用）にさらなる複雑さと多様性をもたらしていたと考えられる。

## 6. おわりに

独裁期のカタルーニャでの初等教育における言語（使用）について、カタルーニャ語の教育言語としての使用を目的の一つとした教育刷新運動の時期も含めて述べてきた。政権によってカスティーリャ語が強制され、カタルーニャ語は教育言語としても教科としても禁止された。しかし、教育現場での言語（使用）にはカタルーニャ語の廃止が一様に見られたというわけではなかった。授業外ですらカスティーリャ語の使用を求められた場合もあったが、授業内外でカタルーニャ語が使われていた。特に、教育刷新運動のなかで新設された私立校ではカタルーニャ語を教育言語としていた。こうしたカタルーニャ語の使用は視察訪問の際には隠されたが、教育現場の実態を明らかにする上で重要である。

しかし、インタビューは言語（使用）をテーマとしてもではなく、数も限られている。当時の言語（使用）についてさらに明らかにするためには、協力者のかたりにも登場する国内移民の児童としての経験を持つ人へのインタビューも欠けている。今後の課題は、言語をテーマとしたインタビューを国内移民の児童としての経験を持つ人も含めて実施すること、そしてカタルーニャ語母語話者にはカタルーニャ語でインタビューを行うことである。

### 註

- 1) 第二共和制から独裁期のスペインの教育史についてはDe Puelles Benitez (2010) pp. 253-352. 、カタルーニャの第二共和制期の教育についてはMarquès (1986) 、カタルーニャの独裁期の教育についてはMonés I Pujol-Busquets (1981) pp. 13-140. 、独裁期の教科書についてはGonzález-Agàpito; Marquès i Sureda (1998) を参照。
- 2) 第二共和制期の教育はバイリンガル教育の許可に加え、男女共学と世俗的な教育が特徴である。こうした教

育を破壊するため、フランコ政権は言語の制限に加え、男女共学の禁止や宗教教育の義務化なども行った。

De Puelles Benitez (2010) p.298.

- 3) 教育刷新運動についてはMonés I Pujol-Busquets (2012) を参照。
- 4) 絵を描くことを目的として行ったインタビューを言語（使用）の研究にも用いることの許可を協力者から得た。
- 5) 義務教育期間は1945年の教育法 “Ley de Enseñanza Primaria” では6歳から12歳であり、1970年の教育法 “Ley General de Educación” では6歳から14歳である。Egido Gálvez (1994).
- 6) “Habla en cristiano.”の意味の変化については以下を参照。LLORENTE, Analía. (2018). “A mí háblame en cristiano: de dónde viene la expresión qué tiene que ver con el español”. *BBC News Mundo*. 2018.12.26. [<https://www.bbc.com/mundo/noticias-46529955>] (2021年5月12日閲覧)
- 7) “Escuela cooperativa” は教育刷新運動で新設された私立校のことを指している。インタビューでは、学校設置の主体は教員たちのグループ、児童の保護者たちのグループ、教員と保護者のグループ、教育者など様々だったことも語られた。この協力者の勤務した学校は保護者たちが主体となったものである。
- 8) “Roser”というカタルーニャ語の名前は、カスティーリャ語では”Rosario”になる。

#### 参考文献

- BARBACIL, Judith. (Ed.) (2008). *Col·lecció La memòria del Futur, 7. Els nostres records d'escola*. Ajuntament de Vilanova i la Geltrú.
- DE PUELLES BENITEZ, Manuel. (2010). *Educación e ideología en la España contemporánea*. Editorial Tecnos.
- EGIDO GÁLVEZ, Inmaculada. (1994). “La evolución de la enseñanza primaria en España: organización de la etapa y programa de estudio”. *Tendencias Pedagógicas*, No.1, pp. 75-86.
- GONZÁLEZ-AGÀPITO, Josep; MARQUÈS I SUREDA, Salomó. (1998). “19 El libro escolar en catalán”. ESCOLANO BENITO, Agustín (dir.). *Historia ilustrada del libro escolar en España. De la posguerra a la reforma educativa*. Madrid: Fundación Germán Sánchez Ruipérez, pp. 469-492.
- LÓPEZ BAUSELA, José Ramón. (2015). “L’assalt a la identitat catalana en els inicis del sistema educatiu franquista: un document inèdit”. *Educació i Història: Revista d’Història de l’Educació*, No. 25, pp. 241-263.
- MARQUÈS, Salomó. (1986). “L’ensenyament a la Catalunya republicana”. *Quaderns de Vilaniu*, No.10, pp. 47-60.
- MARQUÈS, Salomó. (1993). “Importancia de la investigación oral para el estudio de la historia de la escuela franquista”. *Historia de la educación: Revista interuniversitaria*, No. 12, pp. 435-447.
- MONÉS I PUJOL-BUSQUETS, Jordi. (1981). *L’escola a Catalunya sota el franquisme*. Barcelona: Edicions 62.
- MONÉS I PUJOL-BUSQUETS, Jordi. (2012). “La renovació pedagògica a la postguerra en Catalunya (1950-1980) ”. *Sarmiento*, No.16. pp. 57-71.